

2011 年度 リーディング・ユニバーシティ募金による「21 世紀社会のリーダー育成」助成金 活動総括

現代福祉学部 関司直也

【テーマ】震災復興に向けた集落ビジョンづくりのサポート活動—都市部の学生が農村集落の将来像を現場とともに考える—

【活動のねらい】

本活動は、本年 3 月に発生した東日本大震災の被災地である長野県栄村において、現地で復興支援活動を担う NPO 法人栄村ネットワークが進める集落復興ビジョンづくりにおいて、学生が集落住民の皆さんのもとで将来像と一緒に考える実践的な試みである。現代福祉学部・関司ゼミは、昨年度に本助成金を活用し、多摩地域で資源活用・保全のサポーターづくりを試みた。今年度の活動ではその経験や知見を活かし展開することを念頭においている。人口減少・高齢化が進行する過疎地域の中でも、震災発生を契機に内在する地域課題が一举に顕在化した現場において、地域住民の声に耳を傾け、暮らしに寄り添い、世代を超えて考える機会は、都市部の学生が、遠く離れた地域社会との関係性や自らの役割を見つめ直す貴重な経験となることが期待でき、このような経験を通じて社会に出た後での「リーダー」の素養を高めることをねらいとした。

【活動内容】

全体として、栄村での活動は 2 年生中心に行った。前期・後期の授業期間においてゼミ演習の時間を通じて学習や現地入りに向けた準備作業を進め、夏季休暇（8 月下旬）と春期休暇（2 月上旬）に現地調査を実施することで、活動を進めることができた。

具体的な活動としては、前期の 5～7 月の授業期間を通じて、栄村に関する事前学習を行った。素材としては、①栄村ネットワークが発信する現地情報（ネットワークでは週 2～3 回の頻度で、村内全戸に震災復旧・復興の現地情報を配布するとともに、その内容をブログにアップしており、特に集落レベル、世帯レベルでの現地の様子を知る貴重な情報源である）、②信濃毎日新聞の Web サイト（地元紙が発信する情報として、トピックや県の動向をつかむことができる）、③栄村役場などの Web サイト（栄村の震災関連を扱った情報全般をフォローする）、④高橋彦芳前村長の著作（高橋前村長は、小規模自治体が独自で生き抜く地域づくりを長年実践した人物であり、その理念と具体的な内容を理解して現地に入ることは不可欠）という 4 点を取り上げ、グループワークにより、情報を整理し、ゼミ演習内で発表、意見交換を行った。また、ヒアリング調査に向けて、教材を活用して、ヒアリングを行う際の心構えを学ぶ機会を設けた。

夏季休暇中は、まず、8 月 16・17 日に栄村ネットワークが主催する「お祭り応援隊ツアー」に有志が部分参加し、全体を通してお世話になるネットワークの松尾さんへの挨拶・打ち合わせと、栄村の住民の皆さんとの交流の機会を得た。主に大久保集落の夏祭りに参加し、飾り付けやちょうちん行列への参加、後片付けなどを行った。

次いで、8 月 29 日～9 月 2 日にかけて、ほぼ全員が参加し、現地調査を実施した。内容としては、栄村ネットワークとの相談により、村内で一番被害の大きかった青倉集落に入り、集落住民へのお宅訪問を通じて、震災後の生活での困りごとの声を聞き取るヒアリングと、集落内の被害状況を反映させたマップづくりの 2 点を主な活動に据え、集落内の仮設公民館を拠点として進めた。ゼミ生は概ね

2人1組でお宅訪問を行ったが、最初は見知らぬ家に入ることに緊張したり、日中の訪問で留守がちであり成果も上がらなかったが、訪問できた家では、2～3時間滞在して話を聞かせてもらうことができ、次第に、経験を重ねることができたように見受けられる。また、困りごとの声も、ネットワークが把握していなかった個別の世帯の事情や、仮設住宅でのクーラーの取り扱いなどの情報が寄せられ、早速、情報共有が図られる場面もあった。

後期の授業期間中は、本助成金の中間報告会に向けた準備を兼ねて、夏の現地調査の取りまとめを進めた。加えて、これまでゼミと集落との協働を進めてきた福島県喜多方市板の沢集落において、10月末にゼミ3年生が企画提案した「かぼちゃ祭り」を試行することになったため、その準備に2年生の一部も参加し、喜多方を訪問した。喜多方で先輩たちが集落の皆さんと一緒に活動する様子を見たメンバーは、集落の状況や活動内容を栄村の青倉集落と比較して捉える目を養ったようである。

その後、豪雪地帯である栄村には冬に改めて足を運ぶ必要性をゼミ生も感じ、12月に冬の現地調査に向けた打ち合わせに有志が出向き、2月9～13日に再び青倉集落での現地調査を実施した。内容としては、夏の訪問したお宅を中心に再訪し、雪かき作業を手伝いながら、冬の暮らしや雪害の状況、震災後の様子などについて話を聞いて回った。

【活動の成果】

活動の成果として、一連の経験が様々な場面でゼミ生の成長に繋がっていることが大きい。震災後に自分も何か現場に関わりたいという想いを抱いてゼミに参加してくれた2年生にとって、前期の事前学習から積極的に情報収集を進め、夏と冬の現地調査でも、積極的にお宅訪問に臨んでいた印象がある。その点で、普段接する機会のない年上の世代の皆さんと接しながら、農山村地域で暮らすことをあらゆる点で体得する機会になったのではないかと。

その上で、本テーマでは、復興に向けた集落ビジョンづくりを目的に掲げていたものの、集落での活動は個々の世帯の被災状況が異なり、また、集落から離れた仮設住宅で生活する人たちも一定数存在する現実もあって、お宅訪問も戸別訪問に留まってしまい、集落としてまとまって懇親を深める機会にまでは至らなかった。ゼミ生としては、福島・喜多方の先輩たちの様子を目にしたメンバーはなおさら、集落で集まって交流を深めたい想いを抱きつつ、それがまだ叶わない被災地の現実に大いにもどかしい思いをしたに違いない。これも、現実として受け止め、地域の現場は単純ではなく、またじっくり時間をかけて進めるべきこともあることを学んだことも大きな成果と言えよう。

このような成果は、申請書の達成指標にも「一連のプロセスを通して、農山村地域・過疎地域の地域問題に関心を寄せ、またフィールドワークを通して現場の姿を学び、そこから得た課題から問題関心を高める継続的な関係づくりを目指すため、そのプロセスと学生の姿勢の変化についても、途中のレポート等で捕捉し、指標に組み入れたい」と記したように、現地調査中のミーティングやその後の学生レポートで把握できている。本助成金が念頭に置いている「21世紀社会のリーダー」に向けて、まず虚心坦懐に現場の声に耳を傾け、その現実に正面から向き合う経験をし、さらに、それを支えている大人たち（今回ではNPO法人栄村ネットワークのスタッフ）の姿を目にして、自らが社会に出た際の役割や仕事像を具体的に考える機会に着実に繋がったものと考えている。

【今後の課題と展望】

当初は、「震災復興に向けた集落ビジョンづくり」を想定し、集落での現地調査から基礎データと方向性を取りまとめていく方針を予定していた。しかし、現地コーディネーターを担っているNPO法人栄村ネットワークと、現地の状況をみながら逐次相談を重ねた結果、栄村では村の復興対応が

なり遅れたことに加え、ゼミ生が関わることになった青倉集落でも、集落で生活を続けられる住民と仮設住宅に移らざるを得ない住民に分かれる事態となり、集落全体で復興ビジョンを議論するには、今年度は時期尚早との判断になった。

しかし他方で、お宅訪問による個別ヒアリングの必要性が増すことにもなり、学生が集落に入ること、住民同士を繋げる媒介者の役回りを担い始めているという指摘も頂いている。また、図司もこの間に集落の役員などに個別にヒアリングも進めながら、集落の実態把握に努め、栄村ネットワークとの情報共有を図っている。年度明けの4月に集落の公民館が再建され落成する運びとなることから、栄村ネットワークと図司の間では、このタイミングを活かして、集落全体での活動に徐々にシフトすることができないか議論を進めている。また、今年度の青倉集落での学生の活動をモデルにしながら、周辺集落でも学生が関わるきっかけを作って行く可能性も検討を始めている。このような状況からも、ゼミ生には今年度の経験を活かして引き続き青倉集落に関わることが現地からも期待されており、有り難く受け止めている。栄村の1日も早い復興を願いながら、ゼミ生一同、次年度も現場との関係を続けていく所存であり、大学側からも引き続き現地活動に対する力添えを頂ければ幸いである。

以上

学生報告書

1. 活動内容

1) 前期

事前学習として、栄村について地元新聞、文献、ホームページ、栄村ネットワークのブログの4分野から情報を得るために、4グループに分かれて作業。内容をまとめてゼミで発表。

2) 夏休み

・8月16・17日：大久保集落の夏祭りの準備、参加交流

・8月29日～9月2日：青倉集落での現地調査

仮設公民館に4泊5日滞在し、主に震災の被害が目立つ箇所を見て歩いたり、集落の皆さんから主に震災についてのヒアリング、震災の大きさごとに色分けした集落震災調査マップの取りまとめを行った。

3) 後期・春休み

・12月10・11日：冬の現地調査の打ち合わせ

夏合宿活動報告レポートの配布、改訂版集落震災調査マップ配布、2月の現地調査の打ち合わせを行った。

・2月9～13日：冬の青倉集落での現地調査

豪雪地域である栄村において、雪害が復興に及ぼす影響を考え学ぶために、まず豪雪地域に暮らす人々の生活を体験し、また、震災から半年後の状況を理解するとともに、2回目の訪問ということで集落の方々と交流を深めた。

2. 冬の現地調査から感じたこと

中間報告会を行った後も、栄村の動きについてゼミで情報を集めながら、冬の現地調査に臨みました。

今回、冬再び栄村青倉集落に滞在してみて、夏とは全く違う景色を見ることが出来ました。そして「雪害」という言葉の意味が改めて理解しました。雪かきを怠ると家が埋まってしまうくらいでした。

一番驚いたことは、雪を溶かしたり移動したりする事に、結構な費用をかけなければいけないということでした。自宅の前の道まで除雪車が入れるということはとても大切であり、そのためにも小さい家でも1シーズン20万円は灯油代としてかかる上、その他除雪の道具や設備を整えるとするとプラス何百万はかかってしまうそうです。除雪に大金をかけるという概念を持っていなかったのも、体力面だけでなく経済面の大変さもあるのだと知りました。

そして冬の集落を歩いてみて感じたことは、夏に見た家を取り壊されて更地となった土

地に雪が積もり、より一層一軒一軒の家屋が孤立して見えるということです。家の中に居ても薄暗く気持ちが沈んでしまうようだと感じました。雪が降ってからはあまりそとに出歩かなくなったという声や、雪で助けを求めたい時もあるが、皆お互い様なのではないかと思っているという声も聞かれました。

そしてまた心配なことは、雪が震災で傷ついた家に高くつもってしまうことです。しかし一旦雪が積もってしまえば、壊れてしまっても修理は難しく、栄村は12月～4月まで積雪しているため、限られた時期に復興工事をしなければならず早急さが必要です。これは家屋だけではなくヒビの入ってしまった田畑にも言えることであり、更に田での稲作は田植えの時期が決まっており、まだ治っていない田をいかに田植えまでに治すかも課題です。

それでも、たとえ不便だとしても家がもとあった場所なので離れたくはないという人もいて、震災で家が半壊したため家を壊して、もとの場所にコンテナをアレンジして一人で暮らしている方にも会いました。また、集落から少し離れている仮設住宅に移住してしまうと、集落内で集まる機会がより少なくなってしまうため、仮設住宅に住む人からの企画ということで、お母さんたちが郷土料理を作り談話会を行う機会もできつつあります。公民館が出来たらイベントを増やしたいという前向きな声もあり、春先に公民館が再建した後の取り組みが大事になってきそうです。

3. 今後どのように活かしていけるか

栄村青倉集落では、高齢化・雪害という大きく2つの課題を抱えていた矢先に、突如、震災復旧という課題が上乘せされ、もともとの2つの課題がより大きく現れたように思いました。震災復旧は最優先ですが、その先にある高齢過疎化、雪害に対する地域の復興も同時に考えていかなければいけないのだと感じます。復興の具体的な方法を考えることは難しいと思いますが、集落の皆さんが復興してどのような集落になって欲しいというかという夢は言いやすいのではないかと思います。しかし、今年の夏と冬に集落の皆さんにヒアリングさせていただいて、震災については聞くことが出来ましたが、将来の集落についてまでは聞くことが出来ませんでした。今後は、活動テーマで考えていた将来の集落のあり方にまで調査し、さらに集落の皆さんでそれらの意見を共有していく作業を、学生が関わる行事の企画として作れたらと思います。うまく学生という立場、また他所者という立場を活用していきたいと思います。

また今回の活動で得られた大きな経験は、まずヒアリングの時間を多くとって頂くことができ、普段会う機会の少ない上の年代の方々と沢山話をさせて頂けたことです。会話の内容を通して、人生の勉強はもちろん、目上の方と会話するスキルが前よりも身に着いたと感じました。この助成金を通して、今の日本で大きな課題となっている高齢化地域、被災地という2つの問題のある栄村で活動出来たことにより、これからも栄村との関わりを続けながら、また他の地域でもこれらの課題に関わる活動をする時に、今回の経験を生かせたらと思います。 (文責：現代福祉学部 関司ゼミ2年 10J0110 福島早紀)